



音威子府

自然児にえられた村

巖谷 國士 Iwaya Kunio

1943年東京生まれ。東京大学出身。仏文学者・評論家・作家・写真家・明治学院大学名誉教授。シュルレアリスムの研究と実践を軸に、芸術・文化の広い領域にわたって執筆活動を展開。講演や展覧会監修、内外の紀行でも知られ、北海道との縁も深い。著書に『シュルレアリスムとは何か』ほか多数、近著に『澁澤龍彦論コレクション』全5巻。夏にはまた道央を旅する予定。

旭川から車で2時間ほど走り、美深^{びふか}をすぎたところから天塩川沿いに北上して、橋を二度わたり、音威子府^{おといねっぶ}に入った。といっても建物はたまにしか見えず、人影もない。ときおり車がすれちがうだけだ。樹木のほうが住民のようで、初夏の曇り空の下にこんもりと、あるいは鬱蒼^{うっそう}と生い茂っている。

そういえば音威子府はいま、北海道でいちばん人口の少ない村とされている。2018年には770人。面積は275.63平方キロもある（大阪市よりひとまわり広い）ので、人口密度は1平方キロにつき2.8人。日本の自治体としては文字どおりの過疎なのだが、一方で森林の面積が86パーセントにもおよぶという。すばらしい。

以前の人口はもっと多かった。戦後でも1950年には4184人、738世帯いた。現在ではその2割以下まで減っているわけだが、世帯数は493だから半分を割っていない。つまり1戸あたりの人数が5.7人から1.9人へと、大きく減少したということである。

ひとつには介護や医療の問題で、高齢者が離村したためもある。ところが十代後半の人口は多いという意外な特徴もあって、これは「北海道おといねっぶ美術工芸高等学校」が村外から生徒を受けいれているため

である。在校生120人の大半は北海道各地から、さらに20パーセントは道外から来て、多くは寮で暮している。地元出身者はほとんどいないのに、生徒数だけで村の人口の15パーセントに達する。卒業後はほぼ全員が村を離れてゆくので、20代の人口は逆に少なくなってしまう。

それにしても人口770人の村に、美術工芸高校があるというのはすてきなことではないか。「森と匠の村^{ひょうぼう}」を標榜する自治体らしい選択だった。天塩川にうるおう丘陵と山地に広大な原生林のひろがるこの村には、森の自然にかかわる美術工芸を育てるという発想がふさわしい。

もうひとつ、他に類を見ない施設として、通称「砂澤ビッキ記念館」がある。これも「森と匠の村」の趣旨に沿ったもので、現代の北海道、というより世界でも指おりの特異な木彫家・砂澤ビッキ（1931-89）が住みつき、最後の10年間ほどをすごしたアトリエの跡である。

もとは廃校になっていた^{おさしま}茂島小学校の建物だ。1978年、砂澤ビッキに会ってここを見にくるよう誘ったのは、旧・音威子府高校を美術工芸専門高校に改編しようとしていた校長先生である。札幌での都



砂澤ビッキ（1931—89）のポートレート写真。エコミュージアムおさしま（砂澤ビッキ記念館）の「風の回廊」に飾られている。撮影：筆者

会生活に行きづまっていた自然児ビッキは、さっそくやってきて風土とその建物に魅せられ、「運命の別れ道」とまで感じて移転を実行した。

「森と匠の村」をめざす過疎地にとっても、砂澤ビッキの存在と活動は大きかった。私が今回はじめて音威子府を訪れたのは、もちろんこの稀代の木彫家の終の住処と、彼を魅きつけた周囲の環境を見ておきたかったからである。

鉄道の分岐点・川の合流点

やがて駅に着いた。左右対称に翼をひろげた虫のような形の小さな駅舎で、中央入口の上には木の浮彫による「音威子府」の看板が掲げている。独特の書体からして、これは砂澤ビッキの作ではなかろうか。

駅前のはのっぺりした虚ろな広場で、なにか足りない気がする。かつてここにそびえていた「オトイネツプタワー」が現前しないせいもあるだろう。1980年にビッキの制作した高さ15メートルもある一種のトーテムポールだが、10年後に台風で倒壊したため、一部のみ記念館に戻されているという。それでもヤチダモの原木を彫った重さ7トンにおよぶポールを、村民総出で補導車2台に載せて牽き、子どもたちの鼓笛隊とともに6キロ強の道を行進してきたという出来事が、まるで説話のように語りつがれている。

いまの駅前広場には人通りがない。駅舎の扉から入ると、中にも人がいない。日本一黒いといわれる名物「音威子府蕎麦」の店も閉まっていた。待合室のような部屋が資料室になっていて、おもに鉄道史関係の展示がある。駅名を大書した古い看板のそばに、急行「天北号」の写真があるのを見て思いだした。そう

だ、音威子府という難読漢字の地名を憶えたのは子どものころ、全国の鉄道図で知った「天北線」の始発駅としてだった。

北海道北端の稚内駅へ向う国鉄線といえば、以前は宗谷本線と天北線の2本があった。その2本の分岐する重要地点が音威子府だったので、戦前から鉄道の町として栄えた。盛期には人口5000を数えていたが、その3割は国鉄関係者の家族だったといわれる。

だが国鉄の合理化と分割民営化の波に吞まれ、1989年に天北線は廃止された。奇しくも砂澤ビッキの亡くなった年だが、音威子府の人口減少が加速したのもそのころからである。

プラットフォームに出てみると、やはりだれもいない。宗谷本線の特急停車駅とも思えない寂しさだ。青ペンキの剥げた古い陸橋があり、下の雑草の原にマーガレットに似た白い花が咲いている。空気が快く匂う。曇り日で遠くは見えないが、西北の大森林からとどいてくる香気かもしれない。

音威子府、オトイネツプという童話の登場人物を思わせるかわいい名前は、アイヌ語の「川口の濁った川」または「川尻を行くと泥ばかりのところ」の意で、天塩川の西へ曲るあたりに北から音威子府川が合流してくる地点を指すらしい。そこから天塩川の右岸に沿って西へ走れば箴島地区に入る。箴島という駅もあるが、とあるサイトによると、なんと2006年以後、乗車客数がずっとゼロだという。めずらしいことだろう。

箴島は一見して和名に思える（箴は機織機の付属具）が、これもアイヌ語のオサシマンナイ（川尻を下るとある小沢）、またはオタニコロナイ（砂のなかの川）+ピラケシマンナイ（崖っぶちの川）の混成だとされる。砂澤ビッキにふさわしい地名ではないか。

エコミュージアムおさしま（砂澤ビッキ記念館）の敷地の端に立つ木彫ポール（右手前）の向うに、砂澤ビッキの「アトリエ3モア」が見える。廃校になった箴島小学校の校舎を改修して、住居兼仕事場に使っていた。撮影：筆者





記念館の「土」展示室にある大きな牛の木像。倒壊した「オトイネツプタワー」の一部なのだが、制作前につくられた小型模型が左に展示され、全体像を想像できるようになっている。撮影：筆者

駅からの道はややけわしく、蕎麦や馬鈴薯の畑もあった南の咲来（この地名を読める人は少ないだろう）地区よりも森林が深くなる。まもなく小さな集落に着く。民家がとびとびに二、三軒。その先にやや大きな平屋の建物がよこたわっている。赤いマンサード（腰折れ屋根）と縦長の窓からして、これがもと小学校の校舎にちがいない。

手前の畔道に細長い木のポールが立っている。アイヌにもケルトにも通じる円や渦巻や蛇状文の彫りこまれたこの雄大な木のポールの存在によって、ここが砂澤ビッキの旧居、兼アトリエであることがわかる。ほかに倉庫か仕事場のような建物もいくつかあるが、まず記念館へ直行することにした。

砂澤ビッキの晩年を思う

入口に「エコミュージアムおさしま BIKKYアトリエ3モア」という木の看板があり、これが公式名らしいが、前半は箴島自然環境保護館といった意味だろう。後半の「アトリエ3モア」のほうが本来の呼び名で、実際にビッキ（BIKKY）は札幌時代の最初のアトリエ・モア、次のアトリエ・モアモアにつづき、ここを「3モア」と呼んでいた。

モアは一説によるとアイヌ語のモアウ（小舌=のどちんこ）だが、英語のモアは「もっと」の意だし、トマス・モアなら『ユートピア』の著者名だ。フランス語のモワは「私」である。どれもビッキに似あいそうなので、すべての意味に通じると考えておく。

館内は順路ができていて、「風」「土」「人」「森」

「樹」「火」の各室に分けるなど、かなり演出がほどこされている。剥製の熊のいる玄関から「風」の廊下に入ると、実際に風の音がスピーカーから聞こえてきたりする。

なぜ？と問いたくもなるが、左右にならぶ作品はおもしろい。蛇行線や渦巻模様を彫られた鮭や鱈、ブロンズ風の黒い肌にしあげた大海老など。窓側には仮面の連作が展示されていて、不思議でも怪異でもあり、特有のアニミズムを感じとれる。

奥の「土」の展示室に来て、ようやく「オトイネツプタワー」の一部と出会えた。これはすごい。鱗われた大きな木彫の牛の頭部が目を見ひらいてよこたわり、夢にふけりつつ死後の生を享受している。

左には制作前につくられた小型の模型が置かれているので、もとはポールの下から三分の一ほどのところにこの牛の顔があり、正面を向いていたことがわかる。頂上はアイヌの崇めるフクロウだが、下端に馬鈴薯などもあり、いわゆるトーテム（集団を宗教的に結びつける特定の動植物）よりも、風土と生活のシンボル表現に近いかもしれない。

倒壊する前のポールを想像しただけで、雄大さと斬新さに打たれる。広大な森林を擁する音威子府に来て、大樹の原木を手に入れやすくなったことが、こういう大作に着手した一因だ。旭川の近文コタンで生まれ、差別に耐えて育ち、戦後に農業講習所を出て開拓に従事し、1953年に阿寒で土産物の木彫をはじめ、東京の女子学生と恋をし、鎌倉へ移り住んで澁澤龍彦などと交友し、1955年に東京でデビューして評価され、1967年には阿寒から札幌に移ってアトリエ・モアを構え、1979年に音威子府へやってきた砂澤ビッキは、この土地の雄大な森と向きあうことで、自然児としての「私」を再発見したのである。

ちなみに本名は恒雄だが、幼時の愛称ビッキ（蛙の意だとされる）で通っていた。人間と動物を同一視する感覚も、万物に生命を見るアニミズムも、ビッキにとっては生来のものだった。森は人の住处でもあり聖域でもある。樹木は生活の基盤であるだけでなく、共

生し交感し、相互に働きかける生命体である。

こうした自然観はアイヌに特有のものではなく、あらゆる先住民族に共通している。ということは、もともと人類にそなわっていた普遍的な感覚であり、芸術の出発点もそこにしかありえない。そのような確信は音威子府に住んでからの新しい体験によって、いっそう強化されることになる。

すなわち1983年、ビッキは海外交流事業派遣員に選ばれ、冬季の3か月をカナダの西岸地方で過ごした。当地にはさまざまな先住民族が暮らしていて、彼らの木彫作品と出会えたばかりか、現に制作している芸術家たちとも交友できた。ビッキがそこから得たものは測り知れなかった。

アトリエを借りて制作し、ヴァンクーヴァーで個展をひらいて新傾向の作品も発表した。そのこと以上に、アイヌをふくむ北方諸民族の連続性、ひいては世界のあらゆる民族に通じる普遍性を実感し、再認識することができたのは大きかった。

カナダの先住民族の継承する雄渾なトーテムポールの数々を実地に見て、感動と畏怖をおぼえ、それに似た「オトイネップタワー」のような大作をいくつか手がけたこともその例だが、さらに巨木を用いる独自の造形へと進んでいった。

そんなビッキの晩年を思いながら、デスマスクを祭壇風に飾った「人」室をへて、広い「森」の部屋に入ると、そこが「アトリエ3モア」の核心だった。かつての仕事場が演出の上で「再現」されている。作品の展示もかなりあるが、やや残念なのは初期のものばかりだということだ。音威子府に住んでからの作品がほとんどない。これでは「再現」には遠いにしても、す

でに晩年の大作は札幌芸術の森美術館や、2008年に開館した洞爺湖芸術館など、各地の施設に所蔵されているので、やむをえないことではあるのだろう。

それでも素材や道具の展示は興味ぶかい。さまざまな原木のサンプル。作業台の上の使いこんだ木彫具。とくに壁の棚にならぶ鑿^{のみ}や斧^{おの}が数十挺^{ちよう}。その左上にある振り時計の針は正確に3時を指している。

これも演出なのだろうが、カナダから帰国してから連作に、「午前3時の玩具」と題されたものがあることを思う。ビッキの仕事の時間は真夜中だった。本能あるいは狂気に誘われて作業をはじめると、きまって宗谷本線の列車の汽笛が聞こえてきた。それが午前3時だったのだ。

北海道命名の由来

真夜中のアトリエを想像してみる。とくに冬の午前3時。ここは厳寒の地で、気温が-30℃にもなる。しかも有数の豪雪地帯だ。ひと冬に10m以上の雪が積り、一度の積雪が2mを超えることさえある。

もと小学校の校舎が雪に埋まっている。窓の外には雪しかない。寒さはどれほどだろう。そこで鑿をふるおうとすると、汽笛がかすかに聞こえてくる。列車もまた雪の壁のあいだを走っているのだろう。

音威子府の歴史は古い。和人では1857年、松浦武四郎の訪れたのが最初の記録らしい。箴島あたりでアイヌの古老の小屋に泊めてもらい、蝦夷地の通称「カイナー」が「カイ」（この地に生まれた者）+「ナー」（尊称）であることを知らされた。のちに武四郎が蝦夷地を「北加伊道」と呼ぶ提案をしたのは、この「カイ」を尊重してのことだった。

結局「北海道」という漢字表記に変えられてしまったが、その「海」にも「カイ」の意が記憶されている。砂澤ビッキはこの地であらためて「カイ」を自覚した北海道人だったのだろう。

そのようなわけで、北海道でいちばん人口の少ないこの村は「北海道命名の地」といわれ、箴島にはその記念碑も立っている。



復元されているアトリエの壁。鑿^{のみ}や斧^{おの}などの道具をならべた棚の左上に、3時で停まった時計がかかっている。撮影：筆者